

---

# 小さな恋の話。

こつぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さな恋の話。

### 【Nコード】

N0564F

### 【作者名】

こじぶ

### 【あらすじ】

彼、円谷光彦は親に頼まれ、駅のホームへと向かう階段を上っていた。階段を上るとその先に見えたのは、少年探偵団メンバーで思いを寄せている灰原哀。彼と彼女のここから始まる小さなストーリー。ぜひ、ごらんください。注）光哀。この話は以前回答させていただいたブログ内のボタン内容に基づいています（笑）。タイトルはほぼそのままです。

## 1、電車待ちの列に哀ちゃんを発見！どうしますか？

両親に用事を頼まれ、隣の件に住んでいる親戚の家まで足を運んだ10月の第3週の日曜日。

秋晴れというのはこのことで、雲ひとつない真つ青に澄んだ空と、冷気を含んだ、爽やかな風を受けながら、僕はのんびりと歩いていた。

田んぼが多いのどかな街。人は優しく、笑い声が絶えず、お祝いの品を届けるということだったはずなのに、逆に近所の人にもお土産を貰い、結局は行きより帰りの方が荷物が多い始末……。僕はふうふう言いながらホームへと続く階段を上っていった。

1段、2段、3段・・・10段、11段、じゆうに・・・

「・・・あ、れ？」

僕は心の中で呟いていたカウントを止めた。

人もまだらなこのホーム。奥の方に見えたその人物に見覚えがあったのだ。

けれど、信じられなかった。彼女が何故、ここに？でも、確かに、彼女は。

「はいばら・・・さん？」

（ホントに、灰原さん？・・・コナンくんも、博士もいないのに？）

たった一人で電車を待っているのは、やっぱり彼女。ふわふわの柔らかな赤茶けた髪が特徴の、あの少女のように見えて。

僕は残りの階段を駆け上がり、奥にいるその少女の下へ、全速力で走った。

近づけば近づくほど、確認できる。  
やっぱり、彼女は、『彼女』だ。灰原哀だ。

僕の姿を認め、彼女もちょっと驚いたようで、それからくしゃつと笑顔を向けた。

「どうしたの、こんなところで・・・。珍しいわね」  
「え、ああ・・・ちよつと、親戚の家まで用事を頼まれて・・・  
灰原さんは？」  
「私もそんなところよ」

一瞬鷲りのあるそんな表情をしてから、口元を緩ませた。  
どこにいくか、という明言を避けた灰原さんに少し物足りなさを  
感じつつも、それでもいつもと少し様子が違うようにも  
感じ、僕は暫く言葉を搜していた。

暫しの沈黙。

ちらり、僕は隣の彼女の横顔を見つめる。

「何？」

「……いや。……何で一人なのかなあって思ってた」

「……あら、いけない？」

クスリと口の片端を僅かに持ち上げたその表情。また、彼女は何かを僕に隠している。

「いや、……こんな遠いところまで、女の子一人じゃ危険ですよ。……博士は、コナンくんは心配しなかつたんですか？」

「……そうね、多少は心配したかもね」

「かもね、って」

「でも、認めてくれたわ」

「ホントに？」

「ええ、ホントよ。……何、疑ってるの？」

一瞬、不快そうな表情をして、僕を睨んだ。

凶星だったから、僕は何も言えなくなつて、ただその場を誤魔化したくて、軽く鼻先で笑つた。

適当なことを言つて並べてるだけなんじゃなかというふうにも思ふし、彼女の言葉が本当ではないかとも思ふ。

前者だとしたら、何故隠そうとするんだろう。

どちらかとケンカ、あるいは言い争いにでもなつたのだろうか。

それで一人遠くへ行きたくなつたのだろうか。それとも、この先に僕らの知らない何かがあるのだろうか。誰にも知られずに行きたかつただけなのだろうか。

後者だとしたら、一体何故敢えて一人にさせてまで行かせるんだ

ろう。人一倍心配性な博士が・・・。

「来たわ」

はっとして顔を上げると、いつのまにか電車が遠くの方からこちらへと迫っていて。

いろいろ思考がぐるぐると頭の中で回り、考えるのに夢中になっていて、どうやらアナウンスも何も聞こえなくなっていたようだ。

僕は慌てて一歩下がって電車がホームに入ってくる様子をぼんやりと眺めていた。

2、哀ちゃんが隣りの席に！どうしますか？

電車がホームに着き、ゆっくりとドアが開く。この電車に乗るのは、この駅からでは僕と彼女と2人だけ。

車内に入ると、やっぱり人はまだらで、がらんどろとしていた。

反対のホームには、やっぱり若干の人がいた。

そっちはますます田舎へと続く下りだから、電車が込むということはさらにもないのかもしれない。僕らはドアに近い椅子に並んで腰掛けた。

隣の席に座ると、灰原さんは英字が沢山羅列した文庫を開き、読み始める。彼女と何か話題を見つけて話すものだと思っていたから、僕は一瞬拍子抜けして、それから手持ち無沙汰になり、きよるきよると辺りを見渡すと、両手いっぱい渡されたお土産を彼女とは反対方向の隣の席に置いた。

「すごい荷物ね、何が入ってるの」

横目でちらりとだけ僕の手元を見て、それから視線を上げ、僕にクスリと微笑みかける。

(うわ、可愛い……)

他愛のない言葉と共に向けたその表情。本当に些細な仕草なのにすぐにやられてしまうなんて。ますます僕は彼女に惚れている。そう認めるしかないのだ。

「円谷くん？……聞いている？」

ちょっと眉を潜め、訊ねる彼女の問いかけに、僕ははっと我に返

り、ごそごそと紙袋を漁った。

「え、と……。なんでしょう……。えーと、3000円のお小遣いと、僕用に先ほど買ってもらった菓子パンと、ジュースと……。それと家族用には果物が入ってますね。柿に、石榴に……。それに、きゅうりとなすの押し漬け、それから」

「……。随分統一感ないのね……。偏見でモノをいうのも悪いけど、あなたの親戚だからもつと紅茶とか、ケーキとか……。そういうものをイメージしてた」

呆れた表情僕を見つめる灰原さんに対して、僕は苦笑した。

「まあ、いろんな人たちがくれましたから……。あー、あと……。そうだ、南瓜の煮物」

「……。南瓜？……。また、なんで？」

「……。もうすぐハロウィンだとか何とかって」

「何それ」

灰原さんはおかしそうにぷつと小さく笑った。灰原さんはおかしそうにぷつと小さく笑った。そんなにおかしそうに笑うから、僕も嬉しくなって、僕も思わず微笑んだ。

手にしていた英書はいつの間にか閉じられていて、それを見たとき、さらに嬉しくなって。小さくガッツポーズをした。そんな他愛のないことが、僕にはすごく嬉しかった。



3、哀ちゃんが眠り、そのままあなたの肩に寄りかかってきました。どうします

休日に、彼女に逢えたのがとつても嬉しくて、普段いつも誰かしら傍にいるから、独り占めできることが嬉しくて、僕は夢中になつて彼女に沢山のことを喋っていた。

この前少年探偵団の皆と一緒に行った紅葉&ブドウ狩り、それから先日旅行先で起こった珍事件。学校で元太くと話したくだらない会話の内容。その間に何駅通過したかはわからない。けれど、ひつきりなしに僕は彼女に向けて喋り続けていたような気がする。

「それですね、元太くんが……………れ？」

相槌も何も返つて来ない状態に、少々気になつてちらちらと横目で灰原さんの方を見れば、俯いてこっくりこっくりと船を漕いでいるその様子に、僕はぽかん、と思わず口を半開きにした。

「灰原さん…………？寝ちゃったんですかあ!？」

内心ちよつとがっかりする。まだまだ聞いてもらいたいことがあったのに。彼女の話も聞きだしたいことだつてあったのに。結局彼女がどこへ行ったかもわからないままだし。

でも…………。

僕は俯いたまますうすうと寝息を立てている灰原さんを見つめ、穏やかに微笑んだ。

(疲れてたんですよ…………。きつと)

僅かに笑みを浮かべたまま眠っている灰原さん。きつと幸せな夢

を見ているのだろう。何の夢を見ているのだろう、一瞬何か寝言を言ったような気もするけれど、それも聞き取れなくて。

それでもとつても幸せそうな表情をするから。・・・僕にとつても、すごく可愛らしい、独り占めしたい、写真に収めたいというような表情をするから・・・。

僕にとつてもこの上ない幸せで。こんな可愛らしい顔を一人でたつぷり見られたことが、すごく幸せで。僕はずっと彼女のその寝顔を眺めていた。

いつになっても起きない彼女に僕はようやく大満足して、眠ったままの灰原さんが僕とは反対方向に倒れないように注意深く見ながら、母から預かっている携帯電話で次に乗る乗り継ぎ駅の時間をチェックする。

そんな時、手元のケータイがぶるぶると震えだして・・・。発信元が表示されるが、相手の情報が登録されていないのか、電話番号がそのまま液晶に現れて、尚、ブルブルとバイブレーションを続けた。

「・・・僕はお母さまじゃありませんよー。だから早く切ってくださいーい」

眠っている彼女を気遣い、小声でそう呟いてみても、ホールドボタンも何も押していないその電話の相手には通じるはずもなく、尚、バイブレーションを続けていた。幸い、この車両には誰もいない。

仕方なく、僕は覚悟を決めて震える手でホールドボタンを押し、耳に当てた。

「もし・・・」

『俺だ。光彦、わかるか？』

「こ、コナンくん!？」

そう、その声は確かに僕の友人の声だった。何故母のケータイから彼の声が聞こえるのがわからなかったけれど、確かにコナンくんの声だった。だから思わず僕は声を張り上げていた。自分でも吃驚するようなすつとんきような声に、僕は慌てて我に返り、隣の灰原さんを気にする。だけど、一向に起きる気配がなくて、ほっと胸を撫で下ろした。

「なんでこの電話番号知ってるんですか？・・・誰かと思って吃驚して身構えちゃったじゃないですか。探偵バツチだってあったでしょうに」

思わず口を尖らせて抗議すれば、コナンくんは本当に申し訳なく感じたのか、珍しく言葉を詰まらせた。

『わりい。・・・バツチ、ちょっと俺の調子悪くてさ。・・・』

博士に直してもらってんだよ』

「ああ、そうですね。・・・通りで。・・・で。用件は？」

もしかして、と僅かな閃きが僕の中であつた。もちろん、自分から口に出すことはいらない。彼の口からその言葉が出るのを待っていた。

『なあ。オメー、茨城の〇〇の方に行ってるんだろ？もしかした

ら灰原と逢わなかったか？・・・朝からいねーみたいなんだ・・・  
(よしっ！)

ビンゴ。僕は本日二度目の心の中でのガッツポーズをした。

ちらり、横に目をやると、くうくう安心しきったような表情で眠っている話題の張本人。

やっぱり、隠してたんだ。僕だけじゃなくて、彼らにも。不謹慎だけれども、何となく嬉しくなって。もちろん、僕はそのままだんまりを決め込んだ。

僕と彼女の秘密の共有にしたかったのだ。コナンくんが知らない僕と灰原さんだけの秘密。ミステリアスな関係が僕と彼女に僅かながらに出来たのだという、ちょっとした優越感が僕の中で沸き起る。

「えっ！？いないんですか！？どうしたんでしょう、まさかまさか・・・誘拐されたとかっ！！！」

大袈裟に声を張り上げる。もちろん、灰原さんが起きないように微妙に声のトーンを張り上げつつ、であるけれども。

『誘拐？！・・・ハハ、そんな。灰原に限って』

「そんな、わからないじゃないですかっ！！灰原さんだってまだ8歳ですよ、結構落ち着いていますけど、大の大人の男が灰原さんみたいな小柄な女の子を誘拐するぐらい・・・」

『・・・なんだオメー。灰原が誘拐されるの決定、見たいな口ぶりだな。そんなにアイツ誘拐されたってことにしたいわけ？』

「・・・なっ・・・」

凶星だ。思わず口元がひくひくと引きつる。

コナンくんもコナンくん。大体、灰原さんがいないってわりには落ち着きすぎる。灰原さんだから、安心していいのか。誘拐されたっていう確率は微塵も感じることはないのだろうか。

じゃあ、何でコナンくんは自分に電話を入れたのだろう。探偵バツチもないのに、わざわざ。やっぱり灰原さんを心配しているのは代わりはないのだろうか。その辺を僕は彼に問い詰めてみたかった。

「……じゃあ逆に聞きますけど……。コナンくんが僕に電話を入れたのは、何なんですか？僕に何を聞きたいんですか？」

『……ああ……。いや……。だから、さっきも言ったろ？  
・灰原、多分そっち方向にいると思うから。どっかで逢わなかったかかって思ってたか？』

「え!？」

一瞬耳を疑り、そして思わず先ほどよりもさらに大きな声で、短く叫んだ。

びくり、彼女が反応する。はっとして、彼女を見た瞬間、灰原さんはゆっくりと瞼を開けた。が、それも数秒だけ。また目を閉じると、ガタンという振動にとうとう頑なだった重心が解け、僕のほうへと寄りかかる。

「あつ……」

彼女の体温が。

……あつたかくて柔らかい彼女の腕が、僕の腕に密着した。そうしてくてん、と彼女の首が僕の肩にもたれかかる。

「あつ」

僕は2度呟いた。もう電話の向こうで彼が何を言っているかもどうでもよくなつて。ふわり、灰原さんの髪の毛のシャンプーの匂いが仄かに香り、僕はしばらく陶醉しきっていた。

『おい、光彦！？大丈夫か！？』

「あ、はい……。は……。い」

(ああ、もうこのままこうしていたい)

彼女の重みが、体温が、全て僕の体に伝わってくる。こんなに安心しきつた彼女の表情を見るのは初めてで。そしてもしかしたら電話の向こうの彼は何度もそういう経験をしているのかと思うと、ジエラシーでいっぱいになっていた。

「何で、……。灰原さんがこっちにいるって思ったんですか？」

『え？……。いや、何となくだよ』

一瞬言葉を濁す彼に、またか、と僕は思った。また僕に隠し事。それが些細なことだとしても。

けれどもいいのだ。今は僕だつて一つ、彼に隠し事をしている。・  
・まさか、隣に彼が探す張本人がいるとはわからないだろうから。そうして、僕に頭を預けて無防備な表情で眠っているということだつて、きっと彼は気づいていないから。

「灰原さんは、いませんよ」

『あー……。そか。……。わかった、ごめんな。疲れ  
てるのに』

あてが外れたのか、少し戸惑つたような彼に対して、僕はいいえ、とケータイを耳に当てたまま僅かに首を横に振る。心の中でちよっ

とべろを出して。

気をつけて帰ってこいよ、という彼の電話口での最後の言葉を聞きながら、僕はホールドボタンを押し、尚も眠っている灰原さんの寝顔をほんの少し見つめたのだった。

4、もうすぐあなたの降りる駅。まだ哀ちゃんは眠っています。どうしますか？

まもなく、東都駅。アナウンスの声に僕ははつと顔を上げる。

米花町ではなく、僕は東都駅で下車して、電車を乗り継いで、もう一つ用事を済ませるつもりでいた。姉に頼まれた、その店しか売られていない1日数量限定で、なおかつハロウィン期間限定モノのスイーツを買うために。

だから彼女には悪いけれど、今の状況はとっても美味しいところだけれど、姉に怒られるのも怖いし。

迷いに迷って、僕は彼女を起すことに決めた。そつと控えめに彼女の肩を優しく揺さぶる。気持ちよく寝ている彼女を起すのは忍びないけれど、このまま終電まで一人で寝かせるのも危険だとわかっていたから。

「灰原さん、はいば……」

「……………うう……………ん……………おねえ……………ちゃん」

「え……………？」

思わず耳を疑った。今、なんて？

”おねーちゃん”？

確かに彼女ははつきりとそう言った……………ような気がする。

(灰原さんにも、お姉さんが?)

そついえば、と思う。

そついえば、以前、まだ灰原さんが転校してきてそつ経ってないとき、歩美ちゃんがポツリと言ったような気がする。

『歩美は一人っ子だけど、灰原さんにはお父さん、お母さんのところにお姉ちゃんがいるんだって。今は遠いところに住んでいるみたいで、灰原さん、とっても寂しそう。・・・だから、歩美が灰原さんのお姉ちゃんになってあげるんだ。寂しいときはぎゅって抱きしめてあげるの。自分だけ一人で親戚の家に預けられてるなんて歩美だったら泣いちゃうから。きつと灰原さんだって、歩美たちに隠れてきつと一人で泣いてるのかもしれない。・・・だから歩美が灰原さんのお姉ちゃんになるの。お母さんになるの。・・・それで少しでも寂しさを埋められることができたなら、歩美、嬉しいな』

そう、あのかきはまだそれほど親しくはなかったし、彼女の複雑な家庭の事情を想像して、だからあんな大人びた性格になってしまったのか、なんて思っていた。けれどもあれ以来、彼女の家族のことをそれほどまで深く聞いたことはなかった。コナンくんや、博士それに僕らの中で一番仲の良い歩美ちゃんになれば話していたことなのかもしれない。けれど、僕には何一つ詳しいことはわからないでいて。ちよっぴり、じゅくじゅくと胸が痛かった。

「灰原さ・・・」

「・・・お姉ちゃ・・・！・・・いや！行っちゃ・・・だ・・・」

ぎゅ、と裾を捕まれた。眉間に皺を寄せて、とても辛そうな表情

で。

「は、灰原さ……!?!?」

ぱちり、目が開いた。それから、僕の顔をじっと見る。灰原さんの瞳にはじんわりと涙が潤んでいて……。

僕は覚悟を決めた。

ぎゅ、と彼女の柔らかな手を握る。

「ここに、いますよ」

その瞬間、彼女の涙がぼろり、ぼろり、と頬を伝って。僕の掌上に落ちた。温かい涙。

できることなら、彼女を抱きしめてやりたかった。……それができるのには僕はまだまだ子どもだったから、何もできなかったけれども。

それでも、手を握ることはできたから。

ほっとしたような表情を浮かべ、彼女は頭をこてん、と僕の肩に預けた。

けれども、それは先ほどまでの『寝ているから』という結末ではなくて。……ただ、目を空ろにして。ぼんやりとした表情で、前を見据えて。

ぎゅ、と彼女の手を握る僕の手が強く握り返されたことがわかった。

はっとして、僕はちらり、横目で灰原さんを見つめる。

安心したように、すうう、と目は再び閉じられて。再び、すうすうと寝息を立て始めた。

そんな彼女を見ていたら、僕はもう、降りることができなくなっていた。

彼女にずっと最後まで付き添ってあげたかったのだ。

この手を、離すことは、できなかった。

## 5、終着駅に到着しても起きない哀ちゃん。どうしますか？

結局、僕は眠っている灰原さんと共に終着駅まで行ってしまった。

彼女が起きたら、怒られるだろうか。降りるべき場所はもうとつくに過ぎているんだから、きつと怒られるに違いない。

・・・米花町駅へと乗り継ぐ駅はここから8つも手前。

でも、僕にはどうすることもできなかった。だって、仕方ないじゃないか。僕の肩には相変わらず彼女の頭。そして、僕の手には温かく、柔らかな彼女の手。それを払うこともできなかったし、再びすやすやと眠る彼女を起すことはどうしてもできなかったのだ。あの時の辛そうな表情のまま、辛そうな夢を覚えたまま、起こしたくなかったから。

気がつけば、車両に残るのは僕と灰原さんだけ。けれど、あと10分もしたら、また今来た道をこの電車は引き返す。そうわかっていたから、僕は彼女を起すことはしなかった。ただ、ボンヤリとそのまま宙を見ていた。

忘れ物をチェックしてきた駅員が、終点だよ、降りないのかいと声をかけてくれたけれど、大丈夫です、と短く答える。それだけで駅員さんは今の状況を理解したよう。ちらり、横に眠っている灰原さんを目にして、それからにっこり笑ってこう冷やかした。

「すごいねえ、大人もいないのに2人でお出かけかい？・・・デートでもしてきたのかな？」

「で、デート・・・そ、そんなんっ！」

思わず顔を赤らめると、駅員はカラカラと笑った。それから、頑張って彼女をお家まで送り届けるんだぞ、とぼんつと軽く頭を叩かれ、彼はその車両を後にした。大柄な体躯の持ち主であるその駅員

が、ゆっさゆっさと体を揺らして歩くその後姿を、僕は最後まで眺めていた。

そしてその駅員が別の車両を降りた瞬間。今まで開いていたドアが閉まり、反対側のドアが開き、それから少しずつ乗客が入ってきていき、僕の周りに次々と座って椅子を埋め尽くした。乗ったばかりの時はあんなにスカスカだったのに。何となく腕時計を見れば、既に時刻は5時を回っている。

・・・ああ、通りで、と僕は思った。回りを囲むのはスーツ姿の大人ばかり。こちら辺には学校がないのか、高校生の姿すら見られない。

その中に小学生が2人。・・・なんだか居心地の悪さを感じていた。背丈が違う大人たちに囲まれて。思わず縮こまってしまふ。でも、その中で灰原さんだけは守らなくては。そう思って彼女の手をぎゅっと握り返したその瞬間――。

ガタン、ゴトン。・・・そう、鈍い音と振動を成して、僕らを乗せたその電車は再びゆっくりと動き出した。

6、やっとお目覚めの哀ちゃん。ちょっと寝ぼけている様子。どうしますか？

ガタン。それまで比較的乗り心地のいい運転であったはずだったが、突然ブレーキがかかり、電車は少々強引に停車した。

駅と駅の間だというのに。周りは草もない土ばかりの場所。一斉にざわざわと乗客たちが不安、あるいは不快な表情を見せ始める。

他愛ない事情だいいとは思っただけれど……。人身事故、投石……。踏み切り故障……。一瞬の間に、いろんな考えが浮かぶ。

「……何、どうしたの……？」

その声に隣を見れば、案の定、灰原さんが目を軽く擦っていた。少し鼻のかかった、寝ぼけた声。

そんな彼女にちゃんと『熟睡』はできたのだ、とほっとして僕は笑顔を浮かべた。

22

「いえ。……よく眠れたようで」

「……そうね、よく眠れたわ。いい夢を見られた」

「いい夢？」

（あんなに泣きそうな顔になっていたのに？）

そう聞きたかったけれども、何故か訊けずに、僕は暫し無言で灰原さんの横顔を見つめた。でもやっぱり訊きたくて、でも訊けなくて。

再び俯き、モジモジと体を縮こまらせた、両親指をくるくると回して、自分のどうしようもない歯がゆい気持ちを押し殺す。

「……ねえ、知ってるわよね、今日が何の日か」

「え……？」

顔を上げれば、灰原さんが、正面の窓を見つめたまま、遠くを見つめていた。

もちろん、今日は。僕は甘いかぼちゃの煮つけの匂いを鼻に強く感じながら、こう呟いた。

「・・・ハロウィン」

「そう、ハロウィン。・・・ハロウィンって何をする日かって知ってる？」

「ええ。・・・まあ、多少は。31日の夜には、かぼちゃや、蕪をくりぬいて、ろうそくを入れて『ジャック・オー・ランタン』を作り、家々を飾るんですよ。そうしてそれを持ってお化けのカッコをした子どもたちが、『トリック・ア・トリート』って近所の家を練り歩く・・・。『お菓子くれなきゃ、いたずらしちゃいますよー』って。元太くんが喜びそうな、英語圏の国々の一大イベントですよね」

「そうね、簡単にいえば。じゃあ、・・・なんでお化けのカッコをするか知ってる？」

「あ・・・」

僕は言葉に詰まった。そういえば・・・。

ハロウィンといえば、幼稚園時代、毎年ハロウィン会として、園全体で仮装パーティーをしたり、かぼちゃのケーキを食べたりしたこともあったし、

今でも10月も近くなればかぼちゃやお化けに関連したグッズが日本でも出歩いている、親しみは勿論感じてはいたけれど、そんなに詳しく考えたこともなくて。詳しくなんて知ろうとはしなかった。イベントに流されただけ。そんな自分に改めて気づかされる。そうして、意味深に灰原さんがそんなことを聞くから、そしてもしかしたら今日彼女がこんな遠くにいる意味がわかるかもしれないから。

僕は急に興味がわき始めた。

「……知りません」

自分の無知を恥ずかしく感じ、赤面すると、灰原さんは大して気にもとめてないらしく、「そう」とだけ言った。それから、一瞬下唇を噛み、再び口を開いた。

「ハロウインはね、死者の霊が家族のもとを訊ねたり、魔女や精霊が出てくる……。そういう言い伝えがある人たちの間では信じられていたの。その地域では10月31日……つまり、今日が、その人たちにとっての1年の終わりで、収穫感謝祭……。そうした特別な日に、霊たちはやってくる……。人々は、悪いものから身を守るために、仮面を被ったり、魔除けの焚き火を焚いたりした」

「そう、……。まるで日本でいうお盆みたいでしょ？ある地区では、家族の墓地にお参りし、そこだろうそくを立てる、……。日本と同じようなことをするところもあるみたいよ……。？？それにちなんでそんなお祭り染みたことを始めるようになって。宗教を通じて、いろんなところに広まっただけ。そして、日本は何も知らず、宣伝効果に乗せられて。お祭りを楽しんでる……」

僕は彼女の博学にただただ感心することばかりだった。

(でも、だったら、灰原さんは……)

僕は、彼女の横顔を見てあることを考える。

多分、僕の予想が当たっているならば、彼女は死者の霊を弔いに行っただんじゃないだろうか。

きつと、もしかしたら。  
その行き先は。・・・相手は。

「灰原さんは、ハロウインをしに行っただんですか？」  
「え、ハロウインをしに、って・・・」

一瞬眉を顰めたが、言葉の意味を理解してくれたようで。灰原さんは、そのままの表情で、口元だけぎこちなく歪めた。  
何も言わなかったけれど、それが『肯定』の意を表している、と僕は理解した。

「・・・夢、その人の夢だったんですね」  
「え？」

「いい夢って言うてたから」  
「そうね・・・」  
「『おねえちゃん』・・・って言うてました。・・・すごく切なそうに・・・」  
「・・・っ！」

灰原さんは僕の言葉に、少し驚いた表情をしたが、決まり悪そうに小さく微苦笑を浮かべた。

「夢に出たのよ、お姉ちゃんが。・・・久しぶりに笑ってた。・・・よく、来たわねって。そこ、生前よく通っていた場所だったって知ったから。骨も、そこに埋められているって・・・わかったから・・・ようやく、逢えたのよ??？」

彼女の声に、胸が苦しくなって、どうしていいかわからず、何もいえなくなる。

尚も続く、灰原さんの言葉。切なそうな、狂おしそうな、そんな

言葉。

あのときの、僕の服の裾を掴む彼女の手。あのときの表情。それが鮮明に頭の中に再構築されて――。

「夢ならば覚めてほしくなかった。ずっと、傍にいたかった」  
「だ、ダメです、そんなつつつ」

慌てて声を張り上げる。

だめです、そんな。

それが彼女の本音でも。

悲しいことは、言わないで。

けれど、そんな僕に灰原さんはくすり、と優しい表情で笑った。

「・・・わかってるわ。そんなわけにはいかないもの。・・・ただ、そう思っただけ。あのときは強く。・・・思うだけなら自由でしょ？」

「・・・」

『行かないで！行っちゃだ！』

あのとき。

寝言で、彼女はこう叫んだ。必死に僕の裾を掴み、離さない、とでもいうように。

僕の、彼女を呼ぶ声に目を開けた彼女は、『僕』を見ていなかった。

『僕』の言葉に彼女と重なったのか、それとも最初から、たまたまあのタイミングで目を開けただけで僕の言葉すら聞いていなかったのか。

それでも、そう言ってあげたことは今となっては本当によかったんだ、と再確認した。

何も言えずにいたら、僕だっけきつと不安でたまらなくなるから。あのとときの彼女の僕の手を握る温もり。

『僕』を頼ってくれていると思ったから。たとえそれが独りよがりでも。

「ありがとう」

「え？」

「ずっと手を握ってくれて。・・・貴方の手、とてもあたたかかったわ」

「・・・灰原さん」

突如、彼女がバックからポーチを取りだして、小さな缶ケースから一つ何かを取り出す。僕はそんな様子をただぼんやりと見つめていた。

「・・・ねえ。飴、いる？」

「え？」

唐突に言われた、今までとは関係のない彼女の言葉に、一瞬困惑して僕は眉を顰めると、そんな僕の前に現れたのは小分けされた袋に入った小さな飴。

「合言葉は？」

「え、・・・と、トリック・ア・トリート」

「正解」

僕の掌に乗せられた飴に、笑顔の灰原さん。  
その表情を見てみると、本当に嬉しくなつて。・・・僕も満面笑  
顔でもう一度叫んだ。

「トリック・ア・トリート！」

「・・・ねえ。ところで」

「はい？」

「ここ、どこ？何か戻ってる気がするんだけど」

ようやく今の状況に気づいたようで、電車が眠る前と今とじゃ行  
き先が違うという不自然さに不安な表情を見せる。  
僕は思わず苦笑した。

7、平謝りの哀ちゃん。お詫びになんでもしてくれるって!どうしますか?

米花町へと続く電車へと乗り換えるために、ホームを歩く。外はもう真っ暗。普通に帰ればまだ陽が沈む前には帰れるだろうとたかをくくっていたけれど、起こってしまったハプニング。

僕の隣で灰原さんは終始本当に申し訳なさそうな顔をしていた。決まり悪そう。僕に見せるその表情としては、本当に珍しくて、僕は笑いをこらえるのに必死だった。

「・・・ホントにごめんなさい」

「もういいですよ、一体何回言ってるんですか。電車の中でも既に4回は聞きましたけど」

「そんなに言ってないわ」

「言いました。まず最初に1回、途中で2回、それから、最後に1回。・・・まあ、4回で終わるのはあまり縁起がよくなかったし、5回でキリがいいので、もう今回でやめにしましょう」

別に縁起をかついでいるわけではなかったけれど、僕の口から自然にその言葉が飛び出した。彼女もそれがおかしかったのか、ふ、と口元を緩ませる。

堅くなっていた顔の筋肉が少しだけ弛緩されているようだった。本当に律儀で真面目な人だ、僕は改めて実感した。そんなに謝らなくていいのに。そんな顔なんてしなくていいのに。

「・・・寝過ぎて終電まで行って・・・そのまま気づかずに戻ってくるなんて・・・。ホント、どうかしてたわ。・・・私、そんなに熟睡してた?」

「え、ええ。まあ」

「乗り換えのときに起してくれたのよね、なのに起きなかったの

？・・・相当・・・よね」

自分の不甲斐なさを感じているのか、灰原さんは再び表情を曇らせた。こんな経験がないのかもしれない。

・・・ということは、きつとコナンくんだってこんな彼女を見たことがないのだろうか。ちょっと嬉しくなる。自分だけの特権。・・・なんちゃって。

心の中ではどうしてもコナンくんと比べてしまうのだ。・・・何がどうするわけでもないのに。

「・・・あるとき、起こしたくなかったんですよ」

「え？」

「幸せそうな顔に変わったから。寝ぼけて貴方がお姉さんの名を呼んだとき、貴方の顔はすごく泣きそう。苦しそうで。・・・でも、それがすごく優しい顔に変わったから。」

・・・そんなときに敢えて起こしたくなかったんです。せつかくの夢をぶち壊したくなかった。あのあと、どんな夢を見ていて、どんな夢の形に変わったのか僕は推測すらできませんけど」

「円谷くん・・・貴方って」

またしても驚いた表情をして、それから灰原さんは笑った。

「貴方は本当に大人ね・・・。まるで・・・」

彼女はそこで言葉を止めた。そして、ふ、と目元を緩ませる。すごく嬉しそうに。その言葉の先に何があったのかはやっぱり僕にはわからなくて、本当に気になったけれど、

聞いても答えてくれないような気がして、聞くのを躊躇い、唇を無意識に噛んでいた。

「ありがとう、本当に」

その言葉にハツとして彼女を見ると、彼女はじっと自分を見つめていた。その眼差しにときどきと心臓が高鳴る。

「飴だけじゃ済まされないわね」

「え？」

「お礼。・・・何がいい？」

「えっ、お礼だなんて、そんな・・・」

「いいから。したいのよ、今日は」

本当に真面目な真摯な眼差しで射すくめられ、一体どうしていいかわからなくなる。こんなに見つめられることは、そうそうないのかも知れない。

純粹に僕だけを見てくれることなんて、この先、本当にないのかも知れない。ふとそんな不安が僕の胸に沸き起こる。

「・・・じゃあ、いつ・・・。一日、僕とデートしてください！灰原さんがいつもコナンくんに行く場所とか、灰原さんが買い物する場所とか。・・・僕を

エスコートしてください！灰原さんの普段行っている場所が知りたいですっ・・・！あなたが何を知り、何を楽しみ、何を考えて生きているのか」

その言葉に、一瞬灰原さんは目を真ん丸くして、それからちよつと考えているように暫し間を空けて、それから微笑んだ。

「いいわ。いっぱい連れていってあげる。貴方なら、もしかしたら驚かないでついていってくれるかもね」

その優しい表情に尚も僕の気持ちは浮かされて。乗り換えのホームに電車がやってきたときも、暫し彼女の表情に、言葉に魅了されていて、  
慌てて駆け込むような形になってしまったけれども。

米花町へと続くその電車に乗ったあとでも、僕はつり革に捕まりながら、ひっきりなしに彼女と喋っていた気がする。  
彼女とその約束ができたのが、とつても嬉しかった。

それがいつかはわからないけど、きっと近い未来のような気がした。

8、もうすぐ哀ちゃんとお別れです。最後に哀ちゃんに一言

夜の8時を過ぎたころ、ようやく米花町に到着し、僕と灰原さんはもうすっかり漆黒の色になった空の下、ノンビリと 帰り道を歩いていた。大通りには車がまだらで、家々の明かりが煌々と淡い光を放っている。

先ほど家には電話した。出たのが姉だっただからか、思ったより怒られることはなかった。

しかし、6時には帰ってこれたはずなのに2時間も時間をオーバーしたということで、電話口で姉に頼まれた某店 限定モノのスイーツに ついて激しく期待をされたのだけれども、残念ながら 途中下車し、灰原さんに付き合ってもらって行ったときには既に売り切れだったことを言ったらみるみるうちに言葉の様子が変化した。おそらく家に帰ったらそのことでこっぴどく 叱られるに違いない。

けど。

いくら問い詰められたとしても、僕らが実は最後の1つを半分こにして食べたということは一生隠し通すことになるだろう秘密にしよう僕覚悟を決めていた。

「ここでもいいわ、ありがとう」

あともう少しというところで、灰原さんが立ち止まり笑顔で言った。あの角を曲がればあとは一直線の道。

「もう、大丈夫。貴方もお家へ早く帰りなさい。……もう遅くなっちゃったんだから。小学生の……しかも低学年の男の子が、大人もいない状況で、こんな時間までいること自体あり得ないわ」

「何言ってますか、灰原さんも同じじゃないですか」

「……そうね、でも私は」

「それに加えて、灰原さんは女の子なんですよ、一人で帰らせたら、博士がどれだけ心配するか……。この道から玄関先までの数十メートルの間に誰かに殺されちゃ、僕は一体どうすれば……」

尚も食い下がる僕に対して、灰原さんはふつと苦笑した。根負けしたように「わかったわ……」と小さく肩を竦めた。

「じゃあ、……博士に貴方も送ってもらうことにするから。お茶でも」

「いいですよ、今日は帰ります。この道一人でも」

「だめじゃ」

「「え？」」

振り返れば、僕の背後には仁王立ちした博士がどーんと腰を据えた状態で立っていた。そしてすぐ後には、僕の母が。思ってもいない人物に僕は一瞬目を見張る。

「お、母さま」

「朝美さんから聞きました。光彦さん、こんな時間まで女の子を連れてどこで道草食っていたんです？用事を済ませて帰るように頼んだはずなのに。私は貴方をそんなふしだらな息子に育てた覚えはありませんよ？」

「……あ、はい……ごめんなさい、お母さま」

慌てて母の許に駆け寄れば、本当に恐ろしい形相で怒っていて、僕は思わず身震いした。

結局そんな風に僕らは大人たちからこっぴどく怒られ、長かったよつで短かった1日が終わった。次の日になれば、また元太くんや歩美ちゃん、それにコナンくんに敵しく今日のことを詮索されるに違いない。それでもやっぱり笑ってしまうのは、灰原さんを沢山知れたからだと思う。それと……。

「ふふ」

帰り道、母と帰路に着きながら、僕はまた一人にやけてしまっていた。

「何がおかしいんです？」

怪訝な顔をして、母が僕をちらりと見る。その表情には『全然反省していない不良息子』だなんて思われているのかもしれない。

でも、今日ばかりは仕方ないのだ。僕は、いえ、と首を僅かに横に振った。

別れ際に彼女とこっさりした約束。

「今度のデートは誰にもバレないように、しましょうね」

心の中で指きりげんまん。ウソついたら、針千本のーます、なんちやって。

<おしま>

8、もうすぐ哀ちゃんとお別れです。最後に哀ちゃんに一言（後書き）

皆さん、ここまで読んでいただいて、ありがとうございました。

この話は、以前誰かから『哀ちゃん』で指定されたバトン。あのころ、自分指定ではなく、リハビリとして哀ちゃんの話を書いた題材に書いてみました。

・・・相手がコナンくんじゃなくて、みったん。コナンくん、あんまり出てこないってのがまた・・・（笑）

みったん&哀ちゃんを組み合わせてすごく好きなんです。

リハビリリハビリ。

また皆様の元へ戻ってこられますように。もうちょっと待っていてくださいね。すみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0564f/>

---

小さな恋の話。

2010年10月13日17時21分発行